

連歌と万葉集との関係

——万葉的発想についての調査——

岡 本 彦 一

一 この調査は、久松潜一「中世文学における古代的基準——詩歌を中心として——」の見解に触発され、はたして、この論文の見解が妥当であるかどうかを検証してみようと思われたものである。久松論文によれば、「記紀と万葉集とが連歌においてはより所になつてゐる。和歌の流れが古今集を規準とするに對して連歌は記紀万葉集を規準としてゐる。連歌はその点では古代でも上代を基準としてゐるのである。」、あるいは「連歌は上代的基準によりながら、後には連歌和歌一体觀をたてることによつて王朝的基準をもより所とするに至つてゐる」、あるいは「古代的基準の二の系列は時に對立し、時に調和して中世文学を形成せしめてゐるのである。」、あるいは「私見では上代的な壮美と王朝的な優美とが複合され、融合されたのが中世の幽玄美であると思ふのである。」というような文章に示されているように、記紀万葉と連歌との關係を重く見、それに王朝和歌との關係があつて、ここに連歌の幽玄美の世界が構成されたという図式を描いていると見て大過はなからう。もちろん、厳密に言えば、「基準」ということが何を意味するか、この久松論文では必ずしも明確ではない。わたくしの推察するところでは、「上代的

連歌と万葉集との關係

基準」というのは、つまり、へ上代の文芸、いわば記紀万葉の文芸精神をとつてもつて自己の文芸の精神とする、そういう場において、自己から眺められた上代文芸精神のあり方^レなのであらう。

そこで、この調査では久松論文の上代的基準のなかで万葉をとりあげ、これと、いわゆる純正連歌、とくに、二条良基より宗祇に至る連歌との關係に範圍を限定した。連歌をこのようにしほつたのは、この期には「連歌和歌一体觀をたてることによつて王朝的基準をもより所とする」ものが現れたものの、なお連歌というものを代表するのは、この期のそれであると見られているからである。

しかし、私見によれば、連歌の本質から考へて、この期の連歌がもつとも連歌的であつたかどうかは別のことである。連歌の本質はむしろ短連歌・栗本衆の連歌・民衆の連歌・近世の俳諧連歌にあるのであつて、いわゆる純正連歌は連歌の和歌的偏向様態ではなかつたかと思ふ。ただし、この問題はここに論ずることはやめて、別の機会を得たい。

二 連歌論にあらわれた万葉に対する関心について。

連歌論を通覧して、万葉に語り及んでいることの多いのは良基と宗祇とである。良基の著述を見ると、付合の例に万葉をとり出したる、寄合を万葉にとることを述べている。また、古語については「親行・仙覚が源氏・万葉ノ説ヲモ皆可用也」と万葉に関心を寄せているかと思うと、「万葉ナドヲ多ク鎖リ集メタレドモ上手トハ云ベカラズ、只朝夕ノ事ヲ珍敷スルヲ本意トハ云ベキニヤ」などと否定的になつてもいる。おもしろいのは「筑波問答」のなかで、「この比は万葉はやり侍り、まことに歌の根源にてあれば、よくよく御覽すべきにや」と「連歌稽古には何か肝要の物にて侍るべき」という問に対して答えているかと思うと、「初心のほど、ゆめゆめ万葉以下の古き事を好み給ふべからず」と一方では否定している。もちろん、後者の方には「初心のほど」という限定はついているのであるが。

また「十問最秘抄」には「いかに万葉古今以下を空に覺えたる共連歌面白からずは只隣の宝をかぞえたるが如し」と手きびしく否定したりしている。ただ良基の著述には特定の人に宛てて書かれたものもあり、執筆の動機や年次も違うのであるから叙述に一貫性がないのを敢てとがめるにはあたらぬと思う。それがたとえ否定的にもせよ取りあげられたことは、やはり万葉への関心を示すことであり、事実、「この比は万葉はやり侍り」であつたのであろう。連歌界が万葉に関心を示した以上に良基その人は特に万葉に関心をもつていたはずである。良基は由阿をまねいた万葉を語らせ、自分は「万葉詞」の著述をなしている。このように関心はあつたのだが、その連歌における限界は「詞ヲ広ク使ヒ寄合ヲ知事、万葉ニハシカズ、但シ常ニ好ミ用レバ、連歌ノ姿モ荒クナル也、殊ニ用捨シテ簡要ノ時出

サルベシ」というところにあつたとみてよい。そして、万葉は特に寄合として重んじられたようである。前記「万葉詞」も連歌における寄合のための万葉研究であつたのであり、「万葉・源氏、代々ノ袖中抄ナドマデモ晝夜ニ沙汰アリテ、寄合ヲ書拔タリシ也」とあるように万葉の寄合については種々研究している。また、それを實際に出すときも「源氏万葉の寄合、一座に三度の外は不可好」といい、つづいて「寄合の珍しきよりは心の珍敷こそ面白、当座も聞へ侍れ」とある。つまり、相当きびしい限定つきで、万葉の寄合がみとめられたということになる。さらに、連歌論中には万葉が単独で語られているよりも、むしろ源氏万葉とならんたり、さらに古今、狭衣等と並列してあげつらわれているのがほとんどである。このように万葉は特立して連歌と濃厚な関係をもつていたというわけではないのである。

心敬になると「八雲御抄にも、稽古といへばとて、あながちに天竺もろこしの文をつくせにもあらず。万葉・古今集・伊勢物語などのうちなるべし。……万葉集をば、此の比のかたつ人は、心言葉こはくてつやつや心得ぬ物とて、もて出でぬさまなり。梨壺にて読みとき仮名になし侍れば、いかなる女房なども、もてあそぶものときこそ申し侍れ。さまざまの言葉、艶なる歌、こよなう侍るといへり」とあるが、彼は実際どこまで万葉に近づいていたであろうか。むしろ「頓阿法師なども懇にしろし残て云、万葉 三代集は聖人の糟粕なり、徒に心を尽すべからず」というのが、彼らしいところではなからうか。

宗祇になると、「吾妻問答」によれば、万葉以下八代集、その他

家々の集は皆稽古によろしいものといひ、さらに「万葉は世あがりてこほはしきなど申す人、口惜しき事にゆ、其は只万葉の心をも知らざる故也」と万葉支持の言説が見られる。

その他、くだくだしい引用はやめるが、連歌論の中に見出される万葉受容の態度は、さきに良基のところでも要約したところであるが、次のようなところに結着つけられるのではなからうか。「其歌の面影うかふはいかにもおもしろし、いつれにも世にあるほとんどの事、歌にても古事にも、又万葉伊勢物かたり源氏さ衣なとをよくよく見心うへし、さてそれを毎々とり出す事はみくるし、見くるしとてしらぬは無下也」というところであろう。純正連歌において、万葉は代々の勅撰集、源氏狭衣等の物語と同列にあつたとはいへる。耳遠なるもの、こわごわしいものとして避けるという傾向をなくしようとしているわけである。では、実作において、万葉がどう取り入れられていたかというのが、次の問題となつてくる。

三 万葉的なものを実作にどう取り入れたか。

ここでは菟玖波集・新撰菟玖波集について、万葉と関係のある句、および、古今、新古今、その他の歌集、源氏物語、伊勢物語と関係ある句を、菟玖波集は福井久蔵校註の日本古典全書、および伊地知鉄男校註の日本古典文学大系、新撰菟玖波集はおなじく日本古典文学大系の頭注によつて拾つてみた。大系の方は抄であるが、新撰菟玖波集などはかえつてその時代の連歌がくつきりと浮んでくるようでもある。結果、次の表を得た。

	菟玖波集	菟玖波集抄	新撰菟玖波集抄
古今新古今他歌集源氏伊勢万葉	4.3%	2.8%	3.4%
	1.4%	0.3%	4.5%
	3.5%	2.9%	4.2%
	1.4%	1.9%	1.4%
	1.1%	0.9%	
	0.8%	1.2%	0.7%

この表を見ると最も安定しているのは源氏、ついでには万葉ということになるか。このことは、百韻のなかには源氏はかならずあるべきだという約束があり、またそれは三句を限度とすることは、さきに引用したように、良基が「源氏万葉の寄合、一座に三度の外は不可好」と説いている。万葉はかならずしも、あるべきだという程のことはなかつたが、それでも源氏に準じて扱われたこともこの良基の説でわかる。つまり万葉は源氏と同様な仕方でも重んじられていたのである。こうして百韻での安定性があつたので、撰集をつくるときにも平均に出てきたものと思われる。さらにについて古今が安定していることは当然といつてよからう。連歌は和歌と深くむすばれ、和歌の中核は何といつても古今であつたからである。新撰菟玖波集の抄に至つて新古今がぐつと出てきたのは、いかにもまざまざとその時代の連歌のあり方をあらわしている。「竹林抄」の七人、それに撰者である宗祇、その相棒の兼載、それに肖柏、宗長をえらんだのがこの抄である。これらの人々は新撰菟玖波集の最主要作家であり、心敬、宗祇をはじめ、皆新古今へのいちじるしい傾斜をもつた

作家であつた。

熊野千句第一の百韻を調べ、大体それらしい発想のところで拾つてみると、古今3例、新古今6例、源氏2例、伊勢1例となり、万葉は、ほぼそれらしいと思われるのが1例であつた。この百韻で目立つたのは玉葉・風雅の発想である。これはまた別に考えねばなるまい。

水無瀬三吟百韻では、古今・新古今よりも、その他の集の歌によつた例が多かつたが、作者としては、後鳥羽院1、俊成2、定家2、行尊1、それに古今、後撰より各1といふので、圧倒的に新古今的色彩だといつてよい。そして万葉、源氏はなかつた。

以上によつて、連歌作品中の万葉の数量的な位置がほぼわかつたことと思われる。もう一度概括的にいえば、発想のよりどころとしては、万葉は古今、場合によつては新古今にはるかに及ばない。連歌発想の本流とも目されるものは一応（特に一応とことわりたい）古今・新古今の線であつた。万葉集はそうした和歌の線というよりも、源氏と相ならんで特殊な地位をもつていたものとみてよからう。それは百韻に変化を与えるときに、反面安定をも与える役目を果たしたものである。「常に好み用」いるものでも、「毎々とり出す」ものでもなかつた。適当な場合に現われて、目新らしさを感じさせ、また一方、出るべきものが出たという安堵感をも抱かせる、そういういた働きであつた。かといつて古今・新古今が毎々とり出してよいものかという、それはやはりそうではなかつたのである。連歌の基体をなすものは地連歌であつたからだ。この地連歌の発想については稿を改めたいと思つている。地連歌は、当時にあつては、

あまり変りばえもしない発想であつたかも知れぬが、連歌発想の変遷を歴史的にふりかえつてみるときに、それは、これこそ連歌的発想だ、といわれるものをもつていたことがわかるからである。それはさておき、こうした地連歌のならぶなかにちりばめられる名句、それに万葉は源氏とともに重要な位置を与えられていたのであつた。では万葉は実際にどんなかたちで登場したか。寄合である。一、二を挙げてみよう。

「菟玖波集」に、

つみてぞかへるやどのすみれを

花見ては一夜もぬべき山里に

頼阿

赤人の「春の野に葎摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」をふまえたもので、前句「すみれ、つむ」に「一夜ぬる」をつけた。

「新撰菟玖波集」に、

たびにしあればなぐさみもあり

あさけもるしづが椎のはたくをみて

宗砌

有馬皇子の「家あれば筥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」をふまえたもので、「たびにしあれば」に「椎のは……もる」をつけた。

頼阿の句にあつては「やどのすみれ」、「山里」と場が転換されているし、宗砌の句にあつては「なぐさみもあり」を生かすために、椎の葉を、朝飯をこしらえるために焚かせている。ともに原歌のもつている味わいとか雰囲気を生かすなどということはなく、ただ有名な歌の句を分解して利用したにとどまる。上代的規準としてのあり方とはこういうものではなからう。芭蕉の言にもある、古人の求

めたることを求める、というような、万葉なら万葉に肉迫する気概は前記の連歌にはない。後世、アララギの土田耕平は「草枕旅にしあれば母の目を火鉢ながらに香たきて居り」と詠んだ。しかしながら、引用した連歌のこうしたパロディにこそ、本当の意味での連歌的なものがある筈なのだ。

次に、こうしたいわゆるふまえるとか寄合とかいつた関係ではなく、万葉の語句がどんなふうに入っているであろうか。これも一、二例を挙げてみたい。

熊野千句第一に、「たく火に旅のやとりとふ暮」という句がある。試みに「国歌大観」を見ると、「たひのやとり」は万葉に3例、そのうち1例は玉葉に収載、さらに新千載に万葉時代の長歌1例、計5例、「たひのやとりの」は新千載に1例、「たひのやとりを」は万葉に1例、風雅に1例、計2例を見出すのである。これはあるいは偶然の結果かも知れぬのであるが、ただこの数字だけを見ると、万葉と、玉葉・風雅・新千載と、熊野千句のこの句とは非常に近い関係にあるといえる。さらにいえば、万葉が、こういう語句をおして連歌に現われているといえるのか、それとも万葉が玉葉・風雅・新千載とおして連歌に現われているといえるのであろうか。ただちにそういう結論を出すことは危険なことではあるが、こういう点もさらに調査をすすめるべきではなからうかと思うのである。

また「真砂地にふりをく霜の消やらて」という句がある。この「ふりをく霜」にあたるのは、万葉集卷九「前玉の小崎の地に鴨をはねぎる己が尾に零置流霜乎掃くとにあらし」というのが1例あるのみ。万葉には「霜置く」も、「霜降る」も数例あり、「霜置く」

2例、「霜は置く」1例、「霜の置く」1例、計4例、「霜降る」3例、「霜は降る」2例、「霜の降る」4例、計9例。用例は「降る」の方が倍以上になるが、ともに多数の例ではないから、ただちに「降る」の優位を考えるのは早急にすぎるとも、それにしても「霜降る」の方が万葉らしいのはどういふものであるか。それはともかく、熊野千句第一における単なる語彙の上での関係を二つばかり取り出してみたが、これとても特に上代的規準を云々するには遠いすがたであつたように思う。

たしかに万葉は連歌に入つてきている。しかし、当時の（南北朝以来室町末に至る）和歌の世界にも同様に万葉は入りこんでいる。かつて金槐集にあつた、ああした数首の、特立した万葉調的存在ではなくして、もつと地みちに万葉との連絡は保たれている。この場合でも、和歌の表現のおく深いところで、その真髓が触れ合うようなかかわり合い方をしているとは思えぬ。連歌においては、更に連歌的にいなされたかたちで現われているとみられるのである。

四 それでは連歌と万葉との関係ははなはだ薄いものであるか。連歌と万葉とが、本質にふかかかわり合うような触れ合いはないのか。

連歌の表現は、和歌の情緒纏綿と迂余曲折しているのに対して、はなはだ単純率直である。もちろん、心敬の言葉借りていえば、「いりもみたる」表現はないではない。このいりもみたるものでも、情緒纏綿ではなくて、かりつとした表現である。含まれている意味は難解に過ぎるほどである。しかし、表現そのものは単純率直であ

る。それは何に起因するのか。一句の短小さである。和歌が五句、三十二文字にわたつて詠みくだすのに対して、連歌はその半分の十七字、あるいは十四字で一句のことわりを立てねばならぬ。含蓄もなければならぬ。必然的に即物的にならざるを得ない。世界を切り取る。物を並べる、取りあわせる。叙述を抜く。叙述表現の可能性のあるものを、形態上の制限のために叙述しているひまがない。すなわち、言葉足らぬ故の象徴的表現となる。写実的具象的表現が極度に集約化単純化されたが故の象徴性を帯びるようになるのである。いわば具象的象徴表現とでもいおうか。こうした表現が、その写実的・具象的なという面で、万葉と一脈相つらなることとなる。

古今以後の手弱女ぶりではなく、万葉的益良夫ぶりに通ずる。だが、これは、万葉などを中心とした上代的規準であろうか。様相は似ていても、連歌のあり方から必然的に出てきたものであつて、規準として意識された結果の産物ではないのではないか。

さて、連歌と万葉の歌とのかわり合いを種々の角度から眺めてきたが、その万葉というのがはたしてどんな万葉であつたか。このことについては、かつて、風巻景次郎「中世文学と万葉集」(万葉集講座、第四卷)があつて、ここに精しい調査が示されている。この調査は、定家の撰した新古今・新勅撰と為家の撰した続後撰・続古今の四勅撰集をもとし、これに現われた万葉関係の歌を検討し、出典を万葉集に求めたものと古今六帖、赤人集、柿本集等に現われた作品の数を比べ、次のような数を示している。分子は万葉、分母は万葉以外の資料による歌の数である。新古今4455、新勅撰2226、続後撰926、続古今3958。そして次のようなことを述べている。「古

今六帖、赤人集、柿本集、家持集等の本が万葉集と同資格の資料として用いられたと思われる」、「万葉集は絶対視されてはいなかつた」、「当時の京都貴紳はロマンチックな過去憧憬、古典文学の崇敬で、万葉のリアリズムとは反対の立場にあつた」というのである。

このことはともあれ、連歌における万葉の資料は何であつたか。しばらく菟玖波集の万葉について検討してみよう。菟玖波集における万葉関係の作は18例数えられるが、そのうち2例は、一つは万葉的事項ともいふべきもので、赤人・人麿を扱つたものだし、いま一つも古今を原拠としてみるとみた方がよいので、この2例をばいいて、残りの16例を見ると、原拠になる歌が、古今六帖にもあるのが7例、続古今にもあるのが2例、古今にもあるのが2例、拾遺にもあるのが1例、計12例は、万葉以外の資料にもあるのである。このうち、さきに例に出した「春の野に菫」の歌は古今六帖にも赤人集にも見える。また「岩代の野中に立てる結び松心もとけず古思へば」の歌は古今六帖にも拾遺集にも見える。これらは、いまは古今六帖に数えておいた。こうした和歌集に載つていないものは6例ということになる。この数字をかりに6¹²という具合に考えると、前記風巻調査のうち続後撰、続古今の線とはなほ近いものとなる。連歌の場合、歌をふまえるというやり方であるので、必ずしも原典万葉集の歌をふまえたか、古今六帖以下の歌集のそれをふまえたかをきめることは困難である。しかしながら原典万葉集のみが重んぜられたというよりも、かえつて古今六帖以下の歌集にある万葉の歌を万葉の歌として認めていたであろうことも十分に想像されるところである。ここではなほだ勝手な想像を許してもらふならば、次のような理

由によつて、万葉寄合の手引書の存在が考えられるのではないか。連歌にあつては万葉は源氏と同じような扱われ方であること。当時一般の連歌をもてあそぶ人々にとつて源氏はそう読みやすいものではなかつたのであるが、万葉はより一層近づきがたいものであつたであらうこと。宗祇の「吾妻問答」には次のようにいつてゐること。すなわち「稽古にはいづれの抄物を見てよく侍るべく候哉。答えて云はく、此の事何と申しがたし。愚意には、万葉より此のかた代々の勅撰、其の外家々の集、皆もつて稽古によろしく侍るべし。さりながら、人によるべく候。拙者などは、何となく世上の器物にて侍れば、万葉以下八代集・源氏・伊勢物語・大和物語・狹衣・宇津保・竹取などやうの物をも集めて、自然不審の事侍れば、引きても侍る也。如此申し候へばとて、人のためにも我がためにも、其の徳有る事候はぬ、遺恨のみにて候。或は政道にたづさはり、又は奉公に際なき人などは、いかでか事広く稽古し侍らん。但三代集・千載・新古今・名所の抄などは、是非ともに眼にかけられ候はではと存じ候。さりながら、老学の人、小児などの上には、是非の事も大事たるべきにや。しからん人は、古今・新古今・名所集等ばかりをも用ひらるべし」と。つまり、いつてゐることは、自分は職業連歌師だからこれこれの書物を読み、必要に応じて参照するが、世事に忙しい人はそんな読書はむりだから、これこれ位は是非、それもならぬ人はせめてはこれだけと参考すべき書物を示してゐるのである。こうしたことから万葉が古今六帖ですまされる位のこととは十分想像される。なお源氏には「光源氏一部連歌寄合」というような書があつて、源氏巻々にもつく寄合を示したり、梗概を書いたりしてある。そ

こで「万葉連歌寄合」とか、何とかいつた書がなかつたであらうか。良基の「万葉詞」には万葉寄合が記されているということであり、万葉寄合を書き抜いたこともすでに触れた。「万葉集連歌寄合」というような一書があつたとしても不思議はない。さて、そういうものがあつて、手軽に利用されていたとすれば、どんな意味をもつか。上代的規準説の根拠となり得るであらうか。逆に、深くはかわり合はず、かえつて、連歌的にいなししたかたちの、浅いかかり合いにすぎなかつたことの証左となるであらうか。

五 要約

万葉集と連歌とは、深くかわり合つて、新しいものを産み出すほどの関係にあつたということは疑問である。連歌のなかに万葉が生かされ、それによつて連歌が新しく展開をとげたというようなことは疑問である。

なるほど、連歌論には万葉はたびたびかえりみられている。とはいえ、それは限定づきの関心であり、古今・源氏その他の歌集・物語と並列的な関心であり、せいぜいのところ源氏なみの関心であつた。だが、源氏なみということは相当重みのあることである。重みはあるが本質とかかわり合うという深いものではなかつた。このことは実作の方面からも同様に立証し得る。

ただし、当時の和歌をとおして、あるいは特別な和歌的趨勢をとおして、かりにそれが万葉的なものであつたとすると、連歌にも万葉が入つてきた、相当なふかみにおいて入つてきたといえるかも知れない。また、連歌のもつ、その形態よりくる表現的特性が、連歌

が芸術的になろうとしたとき、ある特別な写実的傾向をひきおこす。この写実的傾向を万葉の伏流が表面に出たといひ得るかどうか。もしそういうことが立証できるなら、これは深くかわり合つてゐるといえる。だが、このことについては、いまは触れなかつた。

つまり、本稿における調査の範囲内では、上代的規準ともいわれるべきようなかわり合ひを見出すことは困難であつた。また別な視角から、別な視野を展望したときに、どんな結論ができるか、それはおのずから別のことである。

注

- ① 「国語と国文学」昭和三十六年一月号。
- ② 「擊蒙抄」・「九州問答」参照。

- ③ 「九州問答」参照。
- ④ 「連歌十様」参照。
- ⑤ 小島憲之「由阿・良基とその著書」〔万葉集大成〕第二巻）および、小島憲之「室町期における万葉集」〔国語・国文〕昭和十七年一〇月号）参照。
- ⑥ ⑦ 「九州問答」参照。
- ⑧ 「知連抄」参照。
- ⑨ 「ささめごと」参照。
- ⑩ 「所々返答、第二書簡」参照。
- ⑪ 「心敬僧都庭訓」参照。